

『今月の天候と農作業』

通巻第5537号
11月号
平成23年11月4日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【九州南部1か月予報】
向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	10	20	70
降水量	九州南部	10	30	60
日照時間	九州南部	60	30	10

【概要】

九州南部では天気は数日の周期で変わり、平年に比べて曇りや雨の日が多いでしょう。期間の前半は気温が平年より高く、かなり高くなる可能性もあります。向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。降水量は、多い確率60%です。日照時間は、少ない確率60%です。

〈1週目の予報〉 11月5日(土)～11月11日(金)

天気は、期間の中頃に高気圧に覆われて晴れる所もありますが、気圧の谷や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、期間のはじめと後半に雨の降る日があるでしょう。

(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、高い確率80%です。

〈2週目の予報〉 11月12日(土)～11月18日(金)

天気は、数日の周期で変わるでしょう。

気温は、高い確率50%です。

〈3週目から4週目の予報〉 11月19日(土)～12月2日(金)

天気は数日の周期で変わり、平年に比べて曇りや雨の日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

普通作物

◆大豆

1 収穫

収穫適期の目安は、葉が黄変して落ち、莢が淡褐色になり、莢を振ると中で「カラカラ」と音がする時期となります。

大豆コンバインで収穫する場合、青立ち株や大きな雑草と一緒に収穫すると、茎汁や土で汚損粒の原因になりますので、作業前に抜きましょう。

収穫作業は、茎水分の高い朝方や夕方は避け、晴天の午前10時以降の日中に行いましょう。

逆に、バインダーや草刈機で収穫する場合は、衝撃による脱粒ロスを防ぐため、水分の高い早朝か夕方に作業を行いましょう。

2 乾燥

大豆は、米麦と比べ乾きにくく、無理な乾燥をすると、しわや皮切れの原因となります。自然乾燥の場合は陰干しとし、機械乾燥の場合は、高温で急激な乾燥をせず送風温度を30度以下に設定し、ときどき攪拌しながら徐々に乾燥しましょう。

◆ソバ

1 収穫

バインダーや手刈りによる収穫は、子実の70～80%が黒変した時期の朝夕に行います。刈取り後は、10日ほど島立てし子実が粉状になるまで乾燥しましょう。

コンバインの場合は、子実の80～90%が黒変したときの晴天日に行いますが、茎葉に水分が多いと詰まりの原因になりますので注意します。

2 乾燥

乾燥は品質が低下しないよう直ちに行います。米麦用の静置式乾燥機などで、30度以下の低温で徐々に乾燥します。乾燥後は風選し、粒選別機などで夾雑物を取り除きます。

◆麦類

1 ほ場の準備

水田裏作では排水良好なほ場を選び、深耕やサブソイラ

での湿害対策を行い、砕土は丁寧に行うことがポイントです。

麦は酸性土壌に弱いので、石灰質資材で酸度を調整し、堆肥は1t程施用します。元肥は地区基準に基づきます。

2 種子消毒

黒穂病、斑葉病対策として薬剤による種子消毒を必ず行いましょう。

3 播種

適期播種は重要であり、早すぎると凍霜害を受けやすくなり、遅れると穂数が不足しやすくなります。山間部では11月中旬頃、沿海部では11月下旬から12月始め頃に播種し、その後の安定した出芽苗立ちや生育のため、ほ場の周囲と、ほ場内に3m間隔に作溝を入れる等の湿害対策を行いましょ

う。
(鎌田 博人)

果菜類

◆ 共通事項

本格的に暖房を開始する時期となります。11月末までは寒暖の差が大きいため、この時期から内張ビニルを優先した保温を行うと、ハウス内の湿度が高まり、軟弱徒長気味の生育となり病害の多発生につながります。加温機が稼働する範囲での内張ビニルの利用を心掛けましょう。また、比較的低温で管理するきゅうり、トマト類は、最低気温が高い日もありますので、内張の開閉を習慣づけずに状況に応じた管理を行います。

◆ きゅうり

ハウス抑制栽培は子づる及び孫づるの収穫期となり、成り疲れにより草勢が低下しやすい時期になりますので、適期収穫を行うとともに不良果の摘果に努めます。かん水量は1.5～2^リ／日程度とし、追肥量は窒素成分で0.2^キ／日程度を目安とします。ハウス内の温度管理は、午前中26～28度、午後23～25度、夜間12～14度とします。

促成きゅうりは摘心栽培、つる下ろし栽培とともに、早いもので主枝収穫から側枝収穫期となります。長期にわたり安定

した収量・品質を確保するためには、草勢をコンパクトに仕上げ「成りグセ」をつけることが栽培のポイントとなります。果実肥大を優先せず、夜間の温・湿度をできるだけ下げて管理することが必要です。内ビニルを解放し湿度を下げ、10度を目安にできる限り低温管理を行います。追肥は主枝収穫開始から、10㎡当たり窒素成分で0.2kg/日を目安に行い、かん水量は0.8～1.0㎡/日程度とし、日中の温度管理は、ハウス抑制きゅうりに準じます。

◆ピーマン

促成ピーマンは、上旬から中旬にかけて収穫量が多くなり、最初の収穫最盛を迎えます。収穫遅れは草勢低下を招き、うどんこ病等の発生を助長しますので、適期収穫を心掛けましょう。また、草勢維持のため、果実の着果状況に応じたかん水、施肥管理を行います。目安として、かん水量は株当たり1.2～1.5㎡/日、追肥は10a当たり窒素成分で0.2kg/日とします。下旬から収穫の終了した第3分枝のフトコロ枝を順次除去し、通風、採光を図りましょう。

◆トマト

促成大玉トマト、ミニトマトともに収穫が始まります。果実肥大の促進と草勢維持のため、かん水と追肥を行います。追肥は、草勢を見て大玉トマトで3段、ミニトマトで5段開花時から開始しますが、開花段ごとに10㎡当たり窒素成分で1kgずつ行います。ハウス内の温度は、午前中25～28度、午後22～25度、夜間8～10度とします。ミニトマトの夜温は大玉トマトより1～2度高めに管理します。

(郡司 孝幸)

葉茎菜類及びいも類

◆レタス

外葉が10枚前後になると結球を始めます。生育適温は15度から20度で、10度以下では生育が遅れ、5度以下では低温障害が発生します。品種にもよりますが温度が高すぎると筍球等になりやすく、低すぎると生育遅延や硬

く締まったチャボ玉（小玉）になりやすくなります。気象変動の大きい月なので下旬にはトンネル資材を設置し、急激な寒波に対応できるように準備しましょう。

◆ブロッコリー

7～8月蒔きのものは収穫期となりますが、収穫の目安は頂花蕾の出蕾後10～15日となります。花蕾の小花がひとつでも開くと等級が落ちますので、収穫遅れにならないように注意しましょう。

◆たまねぎ

普通栽培（4月以降に収穫）の定植時期となります。植付けの深さは3～4センチとします。深植えすると縦長球（レモン球）の発生が多くなりますので注意が必要です。植付け後3～5日間は株元を中心にかん水を行ってください。

◆らっきょう

分球を始める時期です。分球及び生育促進のため、10センチあたり窒素成分で5グラム程度を施用し、土寄せを行ってください。

◆食用かんしょ

収穫・貯蔵の時期ですが、腐敗防止のため罹病いもや傷いも等を選別して貯蔵します。いもは9度以下で腐敗し、18度以上で萌芽します。貯蔵の適温は13度、適湿度は90%ですので貯蔵庫の温湿度管理に留意します。収穫直後のいもは呼吸作用が大きいので一度に大量に入庫すると庫内のCO₂濃度が上昇したり、湿度が増え結露する場合があります。空調がある場合は入庫時から空調で結露を防止しますが、空調が無い場合は貯蔵適温の時間帯に換気して庫内を除湿し新鮮な空気と入れ替えましょう。

◆さといも

中生種の出荷期ですが、収穫が遅れると割れいもが発生しますので、適期収穫を行ってください。また、来年の種芋として優良系統を株単位で選抜しましょう。芽つぶれやセンチウ害のあるいもは除去します。

（河野健次郎）

果樹

1 常緑果樹

◆中晩生かんきつ全般

肥料が吸収されるには、12度以上の地温が必要とされ、今月がその時期に当たります。年明けに収穫される日向夏や不知火などのかんきつ類ではこの時期の施肥が、翌年の花芽の充実に有効とされています。11月中旬までに施肥を行いましょう。

◆完熟きんかん

この時期は、ビニルを被覆したことにより、ハダニが発生しやすくなります。また、収穫直前の防除は、果皮の裂皮を引き起こします。ハダニの発生に注意し、早めの防除を心がけましょう。

秋季加温を行っていた園では、昼温、夜温ともに徐々に下げていきましょう。

◆マンゴー

マンゴーの花芽形成には秋季の低温が最も重要な要因となります。昼間の温度をできるだけ外気温に近い温度で抑え、夜間の最低気温8度程度を維持することで、自然に花芽が伸長し始めます。十分な花芽の発生を確認したうえで、ハウスの温度を徐々に上げていきます。急速に花芽を伸長させると、花粉の形成不良や子房の生育不良を引き起こし、結果不良やミニマンゴーの発生を引き起こすことがあります。開花が始まるまで、できるだけ高温を避け、じっくりと花芽を生育させましょう。

2 果樹園共通

台風等の強風から果樹を守る防風林や防風ネットの整備は、冬の仕事です。防風林は、あまり密閉状態にせず、適度に風が通るように整理します。防風林が高すぎたり、密閉度が高いと、発芽が遅れたり、アザミウマ類などの害虫被害が多くなるので注意が必要です。

防風ネットは、網目のサイズと支柱や根石の大きさが重要なポイントとなります。傷んでいる部分はしっかりと補修しま

しょう。

防風だけでなく、防虫まで考えるのなら、園の上面も覆う多目的防災網の設置も有効です。

(山口和典)

花き

◆電照ギク

11月になると気温が低下し、結露しやすい状況が続きます。曇雨天で夜温が高いと加温機が作動せず、白さび病が発生しやすくなります。親株床から予防を徹底し、本ぽへの持ち込みを防ぐとともに、ハウス内では送風等で結露を防ぐなど、各対策を組み合わせて予防を行いましょう。

また、夜温が急激に下がってきますので、開花の不揃いを防ぐためにもハウスの夜温管理をむらのないようにしっかりと行います。年末出荷作型は摘蕾期になります。花首の徒長防止や花のボリュームを出すために摘蕾作業は適期に実施してください。

◆スイートピー

採花が開始されます。草勢や花のボリュームと気温等を考慮しながら出荷開始時期を決めましよう。11月は曇雨天に伴う落蕾・落花が発生しやすい年が続いています。天候の変化に十分注意し、曇雨天が予想される場合は液肥・かん水を控えるなど草勢に応じた肥培管理を行ってください。11月上～中旬には施設のサイドを閉める気温になります。灰色かび病の初発の時期になりますので、必ず予防散布を行い、微生物農薬のダクト散布を早めに始めましよう。

◆デルフィニウム

中山間地域の1番花の収穫が終了したほ場は、ロゼットを打破させるためにハウスを開放し、低温に遭遇させてください。2番花を3月に出荷するために、スケジュールどおりの温度管理を実施ましよう。沿海地域では花穂伸長期から収穫期に入ります。カルシウム資材を活用し、茎の硬化を図り、収穫後は適切な前処理を行いましよう。

◆トルコギキョウ

生育後半の過剰施肥と曇雨天によりブラスチングが多発しますので、追肥は発蕾前には終えましょう。10月に定植したものはチップバーン等が発生しやすい時期に入りますので、一時かん水を控え、根域を広げるとともにカルシウム剤の葉面散布や灌注処理を行いましょう。

◆ラナンキュラス

植え付け直後は乾燥させないことが重要ですが、過かん水は葉や球根の腐敗の原因になります。活着後は徐々にかん水間隔を広げて根の伸長を図ってください。最低気温が5度を切るようになると保温・加温が必要になりますが、昼間は15度ぐらいを目安にできるだけ換気を行い品質の向上に努めましょう。ラナンキュラスの球根は小さく、それほど養分を貯蔵していないので、開花が始まったら草勢が落ちないように液肥の施用を行いましょう。

(中村 広)

畜産・飼料作物

11月は先月に続き朝晩の気温差が大きな時期ですが、気温の下がりも大きく徐々に空気も乾燥してきます。本格的な寒気が来る前に早めの防寒対策が必要となります。特にすきま風等が入らないよう畜舎の破損部分や出入り口等の補修を行うとともに、シートやコンパネ等を利用して防風対策に取り組み、冷たい空気が直接家畜の体に当たらないよう注意しましょう。また、畜舎を密閉することにより換気が悪くなりますので、カーテンや換気扇で換気量を調整します。牛舎では日中に南側を開放するなど換気に注意しましょう。

ルーメンの発達していない3ヶ月以下の子牛は特に寒さに弱く、下痢等で死亡することもあります。牛房の敷料等をこまめに変えて保温効果を高めるよう注意しましょう。本格的な寒さが来る前に、早めのワクチン接種により呼吸器疾患の予防を徹底するとともに、換気や気温・湿度の管理に心掛け家畜の早期治療や隔離を実施しましょう。

飼料作物のソルガムは、平均気温が15度を下回ると生育は止まり、その後の生育は見込めませんので、早めに冬作の

作付けを行いましょ。イタリアンなどの冬場の牧草は収穫時の硝酸態窒素が比較的高くなる傾向にあります。作付け時に適正な施肥に努め、特に未熟堆肥のほ場への大量投入は避けましょ。もし収穫した牧草が心配であれば、近くの普及センターで硝酸態窒素の含有量を無料で調べることもできますので相談してください。

最後に、10月からの新たな家畜伝染病予防法の施行により、飼養衛生管理基準が改正され消毒設備の設置や畜舎等の消毒実施、家畜の健康観察の励行などが義務化されました。この飼養衛生管理基準を守って畜舎周辺への石灰散布などの衛生管理を徹底させ、伝染病の侵入から農場を守りましょ。

(小坂昭三)

特用作物

◆茶

1 寒害対策

本年も11月の気温は平年並～やや高いと予想され、降雨も多く、耐寒性獲得の遅れによる急激な低温の被害が懸念されます。耐寒性の弱い品種（ゆたかみどり、あさつゆ、さえみどり、おくみどり等）や中切・深刈した更新茶園と幼木園では特に注意が必要です。

- ①防霜施設を用いた対策としては、耐寒性が付与される12月下旬～1月上旬までに越冬芽の耐寒性を見ながら温度センサー設定温度を11月は2度、12月は0度から段階的に温度を落としていきます。
- ②耕種的対策では、秋と春の2回整枝として、秋整枝を高め（最終摘採高さより8割程度）に整枝し、越冬芽の凍害状況と葉層の確保（8割以上）を確認しながら、春整枝で最終摘採面より3～5割上げた高さで整枝することで被害の回避を図ります。
- ③幼木園では、幹割れ防止のため、株元の土寄せを実施します。また、敷草を畝間全面施用はすると射冷却を助長するため中央に寄せます。8月のエン麦や5月のソルゴ1の条播による防風・防寒対策も有効です。

④この他、寒風・凍結対策として防風垣、防風ネットの設置が有効です。零下10度以下で発生する赤枯れは品種間差はありますが、早めに秋肥を施用し、肥料の後効きを避けることが重要です。

2 越冬ダニの防除

近年、カンザワハダニは春先に増加傾向となっており、これを防ぐには越冬前の防除が重要となっています。

飛散防止と散布ムラに注意し、裾葉や葉裏への散布状況を確認しながら、専用ノズルの使用と適正な散布に心掛けましょう。

(岩切健二)

◆しいたけ

1 原木の伐採

原木の伐採は、なるべく晴天が続くような時期を選んで実施します。クヌギやコナラの場合、葉が3～7割程度黄葉する11月下旬頃までが、樹木内の貯蔵養分が多く、伐採に適しており、樹皮の剥がれにくいほだ木となります。良いほだ木づくりのため、適期伐採を心掛けましょう。また、伐採後は、葉枯らし乾燥を1～2カ月程度実施しましょう。

2 発生操作

品種の特性にあった最低気温になってから、ほだ起こしや散水等の発生操作を行います。

なお、低温性の品種など、発生操作前にはほだ木に雨が当たらないようにした方が、安定した発生を期待できる場合がありますので、品種の特性について、種菌メーカーに事前に問い合わせると良いでしょう。

(田中 貴司)

◆葉たばこ

1 病害の耕種的防除のために、冬期耕うんを最低3回以上は行い、菌密度の低減と土壌消毒剤の効果向上を図りましょう。

2 土壌検定の結果、改良が必要な場合には、石灰、ようりん等の散布を行いましょ。石灰散布の注意点として、石灰散布と土壌消毒との間隔が1ヶ月以上必要となります。

3 土壤消毒を実施する際には、薬害、公害のないよう十分注意し、農薬使用基準に則って使用しましょう。また、土壤消毒剤の空缶は、地域で決められた方法で適切に処理を行いましょう。

4 良質堆肥 10 ㎡ 当たり 1200 ㎏ 施用へ向けて、堆肥の材料を十分に確保しましょう。また、未熟堆肥投入を避けるためにも定期的に切返しを行い、腐熟促進を図りましょう。

(中矢恭輔)

内容の詳細について

1 1月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び環境森林課、日本たばこ産業南九州原料本部が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://mawi.sakura.ne.jp/>)

なになに農業アラカルト

施設野菜・花きの病害対策

気温が下がってきました。野菜や花きを栽培するビニルハウスなどの施設では、施設側面のビニルを閉めきったり、多層・多重被覆などの保温対策を行ったり、暖房機を稼働させて保温する時期に入っています。

低温に備えて夕方に施設を閉め切ると、湿った空気が滞留して病気が出やすい環境になります。季節が進んで、更に低温の時期になると、暖房機が常に稼働するようになりますので、むしろ夜間の湿度が下がって病害の発生に適した環境になる時間は短くなります。しかし、暖房機が稼働しないか、稼働時間が短く施設を閉め切っていることの多い11月は、最も病気の発生に注意が必要です。

また、11月末ごろから「さざんか梅雨」といわれる季節の変わり目の連続した雨が降りますので、週間天気予報等に注意して、自分の栽培施設が病害の発生に好適な環境になりそうなときには、適切な予防を行うことが必要です。暖房機の4段サーモやモヤコン、送風タイマー、循環扇などを活用して、湿った空気が滞留しないように定期的に送風することは病害対策として有効です。

保温対策として多層・多重被覆をするときに、昨年使用したビニル等の資材を再利用することがありますが、一度使った資材には以前栽培したときに発生した病原菌が着いているものと考えて、資材の設置後に薬剤による防除を行うことが必要です。

農業用ビニルなどの被覆資材には、防霧効果や防滴効果が付与してあって、病害防除に有効な資材があります。しかし、再利用を繰り返すと、これらの効果が失われることがありますので、施設の内張りフィルムなどは状況を見ながら新品を使うことが重要です。もし栽培の途中で、このような機能性が低下していると判断できる場合には、例年よりも病害対策に注意して、適切な病害対策を行いましょう。

(黒木 修一)



被覆資材の結露

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設野菜全般	アブラムシ類	やや多	平年よりやや多い発生状況です。アブラムシ類はウイルス病を媒介するので、施設の開口部には防虫ネット等を張って飛来侵入の防止に努めます。
	ハスモンヨトウ	やや多	10月以降平年よりやや多い状況で推移しています。中齢以降の幼虫に対しては薬剤が効きにくくなるので、早期発見に努め、若齢幼虫期に防除します。なお、施設開口部には防虫ネットを張って露地作物等からの成虫飛来を防止します。
	タバコナジラミ類(ハイトイブ [®] B (シルバリーフナジラミ)、ハイトイブ [®] Q)	やや多	冬春きゅうり、ピーマンで発生が多くなっています。タバコナジラミ類には薬剤の効きにくいタイプの発生が確認されていますので、薬剤散布後は防除効果を確認し、不十分な場合は追加の防除を行います。
冬春きゅうり	べと病	並	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら直ちに防除します。また、施設内が過湿にならないように換気に努めます。 さらに、窒素切れによる草勢の低下や、逆に効き過ぎによる過繁茂は、発病が助長されるので適正な肥培管理に努めます。
	うどんこ病	やや多	
	褐斑病	並	
	黄化えそ病 ※ (MYSV) ミナミキイロアザミウマ	— 並	ミナミキイロアザミウマが媒介するキュウリ黄化えそ病(MYSV)が、一部施設栽培等で確認され、徐々に拡大傾向にあることから注意が必要です。 本病と疑われる症状が発生した場合は、西臼杵支庁・農林振興局(農業改良普及センター)または病害虫防除・肥料検査センターまで連絡してください。
冬春ピーマン	斑点病	やや多	両病害とも多発してからでは防除が困難となるので、早期発見・早期防除に努めます。発生後は散布間隔を短くするなど徹底した防除を行います。うどんこ病は、乾燥した条件で発生しやすいので過乾燥に注意します。
	うどんこ病	並	
	ミナミキイロアザミウマ	並	10花当りの寄生虫数が1頭から防除が必要とされています。また、多発してからでは防除が難しくなるので、低密度のうちに防除を徹底します。
冬春トマト	葉かび病	並	多湿条件で発生しやすいのでハウスの換気を良くします。
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	前年、前々年より多い	トマト黄化葉巻病はタバコナジラミ類によって媒介される病気で、タバコナジラミ類の発生が多い状況なので注意が必要です。黄色粘着板等を設置し、媒介虫の早期発見・早期防除を徹底します。また、発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り適切に処理します。
	タバコナジラミ類	やや多	
冬春いちご	うどんこ病	やや多	うどんこ病は、多発すると防除効果が低くなるので予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発生初期の防除に努めます。炭疽病が、育苗期から多く発生しており、定植後も同様に多発生の状況が続いているため注意が必要です。発病株は、周囲への感染を防止するため早期に除去し、ほ場外に持ち出し適正に処分します。
	炭疽病	やや多	
	ハダニ類 アブラムシ類	やや多 やや多	収穫期に入り、寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時に防除を徹底します。株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと効果的です。
かんきつ類	ミカンハダニ	並	生息密度が高くなってからでは防除効果が低下するので、寄生率30%または1葉当り虫数0.5~1頭を目安に防除する必要があります。また、収穫前の防除は収穫前使用日数等に注意します。
茶	カンザワハダニ	並	本県のような暖地では冬期でも増殖するので、越冬前に防除し生殖密度を低下させます。

- 1) ※は注意報を発表しています。
- 2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
- 3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnpn.ne.jp/miyazaki>です。